

なは地域貢献便り 2月

「なは地域貢献便り」は、那覇市内の社会福祉法人等施設が、地域の応援団として取り組む情報誌です。今月号は、2団体の地域貢献活動をご紹介します。

精神科に通院する仲間たちとの協力・協働で 誰もが安心して暮らせる地域づくりを 与儀市場通り地域でのこころみ



非営利型
一般社団法人ハーネス
理事長 嘉手川重一氏

地域で必要とされる存在を目指して

非営利型一般社団法人ハーネスは、精神科に通院する仲間たちが地域のニーズに合ったボランティア活動を行うことで、自立と納得のいく社会参加が実現できるよう支援しています。そのため、精神科に通院する仲間たちとの協力・協働で、**①精神障害者等の社会参加の促進と生活支援・就労援助、②高齢者の社会参加の促進と生活支援、③生活困窮者への生活支援と就労援助、④児童等の健全育成事業、⑤動物愛護事業、の課題**を事業目的に掲げ、与儀市場通り地域を活動拠点にして『誰もが安心して暮らせる地域づくり』に取り組んでいます。

それだけに煩わしい人間関係を覚悟してまで地域の自治会などに積極的に関わりたいという人が多くなって当然かもしれません。その様な中、全世帯が何らかの活動に参加する地域自治会の建設はとても困難な課題と言えます。しかし、一人暮らしの高齢者や子どもの貧困問題など、お互いに支え合える地域自治会は今の時代だからこそ必要な存在です。そのため与儀市場通り地域自治会では、主な活動財源をリサイクル事業に依拠し、精神的にも、経済的にも、体力的にも、負担感の無い地域自治会活動を目指しています。



与儀市場通り地域の今と昔

与儀市場通りは与儀大通りの裏手にあり、たくさんの路線バスが行き交うため交通の便に恵まれています。そのため終戦直後からたくさんの商店が立ち並び賑わっていました。子ども会活動も活発で通りの真ん中で綱引きを行ない、いろんな遊びに講じていました。ところが、時代の移り変わりと共に、シャッター通りとなり若者がどんどん離れ、今では高齢者中心の市場通りとなっています。しかし、その現状を憂う住民同士で、那覇市社会福祉協議会や地域包括支援センター、民生委員児童委員等とも連携しながら毎月定例の『地域ネットワーク会議』を開き、少しずつ活気を取り戻しつつあります。

共同売店のオープンと放課後子ども教室の開所も

長い間与儀市場通り地域で営業を続けていた、いわゆる『1銭まちやぐわ〜』が店主の事情で閉店することになったため、2019年7月1日(月)から地域の『共同売店』として与儀市場通り地域自治会が継承することになりました。『共同売店』は、商品の売買だけでなく、地域広場としての役目も担っていて、ユンタクしたり、カラオケを楽しむ人もいます。筋トレサークルの会場としても活用されています。『共同売店』のオープンと同じ日から放課後子ども教室『チャレンジクラブ』も開所しました。『チャレンジクラブ』では安心・安全を心がけながら、学習や遊びを大切に、異年齢の子ども同士の交流や社会体験などに取り組んでいます。



与儀市場通り地域見守り隊の結成

2014年12月には那覇市で4番目となる『与儀市場通り地域見守り隊』も結成され、ハーネスも積極的に参加しています。週刊情報紙『かわら版』の全世帯配布を通して地域見守り活動にも関わって来ました。他にも月2回の地域ふれあいデイサービス「ちむすがりどろくる船増原」や月1回のふれあいいきいきサロン「いいあんべー」では健康増進を図りながらの地域見守りも行っています。

新たな地域自治会と小学校区まちづくり協議会の結成を

那覇市内には約150か所の単位地域自治会がありますが、自治会の存在しない地域も少なからず存在しています。自治会の存在する地域でも組織率の低さから自治会の存在感がやや希薄となっています。誰もが安心して暮らせる地域づくりのカギは地域自治会が握っていると思います。与儀市場通り地域自治会において全世帯参加を目指しつつ、他の地域自治会とも連携しながら、那覇市内の全ての地域での地域自治会づくりにも関わっていきたくと思います。さらに、那覇市が力を入れている小学校区単位のまちづくり協議会設置の取り組みについても、与儀小学校区まちづくり協議会の貴重な経験に学びつつ、与儀市場通り地域自治会も積極的に協力・参画したいと思っています。当面は、隣接する神原小学校区と城岳小学校区での結成に協力・参画したいと思っています。

全世帯参加を目指す地域自治会の結成

2019年3月には、全世帯参加を目指す自治会費『ゼロ円』の与儀市場通り地域自治会を結成しました。那覇市内のほとんどの地域自治会で加入率が20%を割っています。中核都市の那覇市は、商業施設も多く、交通網も充実しているなど生活していくうえで不自由を感じることはないでしょう。



繫多川公民館
館長 南信乃介氏

繫多川地域計画と地域と連携した 繫多川シェアマーケットの取組み

はんたがわシェアマーケット

繫多川公民館を利用する人や関係者から「行く場所がない、生活に困窮している、将来に漠然と不安がある」という声が聞こえてきた。コロナ禍に入って、皆が協力し犠牲者を最低限に抑えようと県民も力を合わせている。一方、全世代で起きた生活リズムの変化が支える活動にも影響している。結果的に感染しあうことを恐れて人との接触も減ったことから誰も「孤立」しやすい状況が加速した。繫多川公民館も感染リスクを避けながら人と人が支え合える取組を模索している中で、はんたがわシェアマーケットがスタートした。

きっかけは、家庭のいらぬものを提供する様子を放送したテレビを見た繫多川在住の若い女性の提案だ。物を提供することで身近な支え合いができないかという案に、公民館も意気投合し、実践することになった。はんたがわシェアマーケットは、コロナ禍の影響により生活が困窮している方や支援が必要な方を対象に、自宅にある物資を1点以上持ち寄り、必要な物と交換する“物々交換形式”をとった。その場の支給ではなく、会話をし関係性をつくることで孤立を防ぐという目的もあるためだ。また公民館が社会教育施設ということから支え合える仕組みを意識してきた。支援する側とされる側をきっぱり分けずに個人の尊厳も大事にするための仕組みだ。ただ、物を持ってこれない方も歓迎し、公民館の簡単な美化活動や大量にある大豆の選別作業などを手伝っていただいている。

いる。繫多川公民館での開催だけでなく出張し、地域住民との顔の見える関係を持っている現地のメンバーと共にキャラバンもスタートすることにした。11月15日の県営繫多川高層住宅、12月19日「ウェルカム栄町市場」にて開催し、それぞれの地域で高齢者や子ども達、親子の笑顔がたくさん見ることができた。開催地の自治会や市場の皆さんが温かく受け入れていただいた。私たちだけでは開催することができないが、志を共にする地域の皆さんとなら実施することができた。内容はキャラバンに参加した方々と地域の方々の絆がより深まる機会になるよう企画した。密を避けるため屋外での開催とし、参加の呼びかけも地域に絞った。参加人数も混みすぎず、少なすぎず、ゆっくり会話を楽しめたように感じた。参加同士でも「久しぶりだねー元気してた?」と近所に住んでいても、久しぶりの顔を合わす機会となったようだった。一緒にキャラバンに参加してくれた地域包括支援センター繫多川(以降、包括繫多川)の皆さんも「コロナ禍でも続けていけるやり方ではないか。来てほしい方が来てくれた。」と話してくれた。来てほしい方と繋がり、その後もフォローできる体制が非常に心強い。



繫多川シェアマーケット
イン県営繫多川高層住宅

シェアマーケットには、もう一つ別の役割がある

シェアマーケットには、個人向けともう一つ別の役割がある。それは支援物資の拠点として、訪問支援等、直接手渡せる人が受け取れるようにしていることだ。例えば地域活動支援センターでは高齢者の見守り訪問支援に活用いただき、児童生徒へは普段接している方々へ託している。必要な時に必要な物を必要な人へ渡るのは、顔の見える関係性があったこそだと感じている。

6月17日からスタートし、毎日、利用してくれる人がいるが、物資を提供してくれる人がいなくては続けることができない。那覇市社会福祉協議会から量のあるものは分けていただき、繫多川婦人会のフードドライブ、地元の豆腐屋さんに支援者が発注して届けていただくゆし豆腐、近所のおいしいパン屋さんのパン、近所の福祉施設のフードドライブ、お歳暮のおすそ分けなど様々な方が協力して成り立っている。提供いただく物にもいろんな方々の想いがこもっている。巡り巡っていく物資からは人はどう生きるか、何を大事にして生きていくのかを考えさせられる。

キャラバン隊スタート

また、コロナ禍においては、こういった支え合いや孤立を防ぐ取組を感染が見られる時期でできるチャレンジを始めて

アクションプラン「繫多川地域計画」を 策定推進（協力：繫多川自治会）

繫多川地域では独自に包括繫多川さんと「繫多川地域計画」(協力：繫多川自治会)というアクションプランを策定し進めている。10ほどあるアクションの中でも高齢者や孤立を防ぐような、ご近所の気に掛け合える取組は2020年度の最重要アクションとなっていた。その基盤があったことで単発的なキャラバンでも人と人が繋がる場を促すことができた。地域にいるコーディネーターが繋がり、それぞれのネットワークを活かし、孤立を防ぐ取組を今後も進めていきたい。公民館では普段の利用者に加えて遠く宜野湾市から利用する方や様々な事情を抱えている方も来館するようになった。またスタッフも地域の中で気になる方々やその些細な変化に敏感に情報交換するようになってきている。それぞれの地域拠点が、アンテナを張って感染防止に務めながら、セーフティネットを張る必要があると感じる。そこで出会った人との小さなチャレンジを応援し、自己実現につながるような公民館運営も重要だ。今後も真和志地域を中心に、自治会や包括支援センター、社会福祉法人の方々とも連携してできる事を積み重ねていきたい。



繫多川婦人会